

国語

(古文・漢文を除く)

2024年10月19日実施
100点満点

医療福祉専門学校

緑生館

2025年度

- 総合看護学科
推薦2期・一般2期入学試験問題
- 理学療法学科・作業療法学科
一般2期入学試験問題

[注意事項]

- 1 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子は29ページあります。問題は第1問～第2問まであります。
- 3 ページの脱落や印刷不鮮明な個所を見つけた場合には、すみやかに申し出て下さい。
- 4 解答用紙の受験番号欄等の記入に当たっては、受験票に記入した内容と同一になるように注意して下さい。提出する前にもう一度間違いがないかどうか確認して下さい。
- 5 解答は必ず指定された解答記入欄にはみ出したり、薄かったりしないようにマークして下さい。たとえば、問題の文中または文末等に **35** の表示のある問いに対する解答は、下の(例)のように解答番号 35 の解答記入欄に正確にマークして下さい。
その際、解答用紙を汚したり曲げたりしないようにして下さい。

(例)	解答番号	解 答 記 入 欄			
	35	1	2	3	4
		☐	☒	☐	☐

(悪い例)

1	2	3	4	
☐	☐	☒	☐	
1	2	3	4	
☐	☐	☒	☐	
1	2	3	4	
☐	☐	☒	☐	
1	2	3	4	
☐	☐	☒	☐	塗り残し
1	2	3	4	
☐	☐	☒	☐	はみ出し
1	2	3	4	
☐	☐	☒	☐	消し残し

- 6 解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取りますから、[注意事項]を正しく守って下さい。とくに、訂正する場合には消しゴムでていねいに消し、消しきずはきれいに取り除いて下さい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第1問

次の文章を読んで後の設問（問1～7）に答えなさい。

自分をなくすというところ、あまり良くないことに聞こえるときもある。そんなの嫌だと拒絶感が湧いてくる人もいるだろう。しかしながら、「生きがい」という文脈でこのアプローチを取ることにより、どんなに有益なものが返ってくるかを理解すれば、これ以上に良いことはないのである。

アメリカの心理学者チクセントミハイによって、人間には「フロー」という心理的状态があることが示された。この「フロー」に達し得たならば、「生きがい」から最も多くのものを得ることになる上に、日々の雑用まで楽しめるようになってしまう。この状態では、自分の努力を人に認めさせようとする必要を感じなくなり、いかなる種類の報酬も期待しないようになる。他人からの承認で得られるその場限りの満足を探し求めずとも、常に幸せでいる暮らし方が、突然あなたの手の届くものになるのである。

チクセントミハイによると、「フロー」とは、人がある活動に夢中になって、その他のものが何も気にかからなくなるほど没入した状態のことである。そのようになってはじめて、人は仕事の喜びを知る。仕事は何か他の目的を達成するための手段として、仕方なく耐え忍ぶものでなく、それ自体が楽しいというものに変わっている。フロー状態になると、あなたはもう生活費を稼ぐために働いているのではない。少なくともそれが最優先事項にはなっていない。あなたが働くのは、仕事自体があなたに大きな喜びをもたらすからなのだ。賃金はおまけに過ぎなくなっている。

無我は、それゆえに、自己という重荷からの解放になるのであって、フローの基本となる。それは「生きがい」の一つの柱「自

分を解放する」ことに該当する。当然、生物学的存在として、人は自分自身の幸せが気になるだろうし、欲求を満足させたいと思うだろう。それが普通である。しかしながら、フロア状態を達成するためには、自我を解き放つ必要があるのだ。結局、重要なのは自我ではない。仕事の中のさまざまな要素を受けとめ、蓄積していくことなのだ。我々が主人ではなく、仕事が主人となってしまうようなフロア状態というものがあって、フロアの中では我々は本当の喜びの中で仕事と一体となっている。個人の目的を真剣になって追求することは、日本では珍しいことではない。人生には、何かと結びつくことが必要なのだ。人が自分の〈生きがい〉を支える小さなものを持つと同時に、それとの結合が人生に方向感覚を持たせ、人生の目的というヴィジョンが表れる。実際、何かと一体となり人生の目的意識を持つことが、小さな〈生きがい〉を輝かせることになるのだ。

日本の骨董愛好家の中では、ときどき次のように言われることがある。――「無意識の創造」が一番の傑作を生み出すのだ、と。現代の芸術家は、自分たちの個性を意識しすぎるようになってしまったと言われる。古の時代の芸術家は、創造者としての権利を主張するために制作を行うことはなかった。彼らはただ自分の仕事をしていて、日常の中でこれを使う人々が、使いやすいと思ってくれるように焼き物作りをするだけで、それ以上のことはなんら期待していなかった。古くから残っている焼き物は、純粋で、誠実な姿をしている。骨董好きの人々によれば、現代にそのようなものはないのだそうだ。これらの器には、匿名の美があるのである。

自己の重荷から解放されて、フロア状態にあるならば、それは仕事の質に表れる。星の器の美は至高であるが、それはこれらが無意識の努力の産物だからだ。星の器を再現しようと現代に試みても、古のもののものにある穏やかな美を作り出すことができないのは、それが何か特別に美しいものを作り出したいという、意識的な行為になってしまっているからかもしれない。我々は直感的に「無意識の創造が一番の傑作を生み出す」という見方が正しいことを知っている。自撮り写真、自己啓発、自己宣伝に溢れた世界の中では、ますますこの原理は正しいという気がしてくる。

日本のアニメはいま世界的に有名になっている。しかしながら、アニメーターの給料が安いということもよく知られた事実であ

る。銀行員や販売員のようなより実用的な仕事に比べると、アニメーターの平均月収は少ない。それにもかかわらず、アニメーターは、多くの若者の憧れの仕事であり続けている。財産を成すことはできないということを十分に知った上で、アニメーターになりたいとスタジオに押しかける若者は絶えることはない。

アニメ作りは厳しい仕事である。「となりのトトロ」「千と千尋の神隠し」などの作品で知られる、日本のアニメーションの巨匠、宮崎駿氏にとつて、映画作りは長時間続く重労働である。宮崎は机にかじりついて、キャラクターを決定し、場面を指定するため、何千という絵コンテを描き続ける。その後それに基づいて、彼が共同設立した「スタジオジブリ」のアニメーターが作画し、洗練させていくことになる。

私は一度スタジオジブリで宮崎駿氏にインタビューをするという光栄に与ったことがある。数しれない賞賛を受けてきた宮崎だが、その発言から判断するに、彼の仕事の喜びは、アニメを作る作業自体から来ていると思われた。宮崎駿氏はアニメをフローの状態で作っている。それは彼のアニメ自体が証明している。彼の仕事から発せられている最高の幸福をあなたも感じとっているだろう。こういう点では、子供ほど正直な消費者はいない。例えば、それがどれほど教育的に価値があるとあなたが思っても、子供には見ることを強要することはできない。それゆえにスタジオジブリのアニメ作品を見せられた子供が、自発的に見続けて、もともととせがむという事実は、宮崎によって作られた映画の質がどういふものかを示す一番の証拠なのである。

思うに、この人は、子供の心理を理解し尽くしている。そして、それはおそらく彼自身の内部に小さな子供が生きているからである。フロー状態にいるというのは、「（今ここ）にいる」のを大切にすることである。子供は、「現在」に生きていることの価値を知っている。実際、子供は過去や未来という明確な観念を持っていない。子供の幸せは、「現在」の中にある。宮崎駿氏の幸福もちょうどそんなふうなのだ。

宮崎はある話をしてくれた。その話はいまだに私に強烈な印象を残している。「一度、五歳の子供がスタジオジブリに来たことがあった」と言う。その子供がしばらくスタジオで遊んだ後に、宮崎はその子と両親とを近くの駅まで送って行った。当時の宮崎

の車は屋根が開くオープンカーだった。「この子は屋根を開けてあげたら喜ぶだろう」と宮崎は考えた。しかし屋根を開けようとしたちょうどその瞬間、小雨が降り始めた。「次の機会にしよう」と宮崎は判断して、屋根を閉じたまま駅まで運転して行った。しかし少し時が経^たって後悔の念が湧き始めたという。子供にとつて、その一日はその一日。二度と同じ日は戻ってこないのだ。子供は急速に成長して、これまでの自分から脱皮していつてしまう。たとえその子が一年後にまた来て、今度は屋根を開けて運転したとしても、同じことにはならない。その貴重な瞬間は、永遠に失われてしまったのだ。

そう語る宮崎の言葉が本当に誠実で、私は深く心を動かされてしまった。宮崎が子供の立場に自分自身を置くことができるから、子供を虜にするアニメの傑作を次から次へと生み出せるのだ、ということはこのエピソードこそ表しているだろう。宮崎は、彼の内なる子供を生かし続けているのである。子供という存在の最も重要な特性は、「現在」、すなわち〈今ここ〉に生きている、ということだ。我々が創造的な人生を送るためには同じ態度が不可欠なのである。

ある意味では、ウォルト・ディズニー氏も「〈今ここ〉にいる」ことの大事さの伝道者である。彼もまた、遺^{のこ}した作品の質から判断するに、フロー状態でアニメーションを作っていた。彼は大きな成功をしたわけだが、アニメーション作りという時間のかかる、恐ろしく複雑な仕事に没入したいと思うことがなければ、こうした一度ディズニーは誰かにこう言われたことがあるらしい。「君はもう大統領になれるほどに有名だ」。ディズニーはこう言い返した。「一体どうして大統領になりたいと思うだろう？既にディズニーランドの王になっているのに？」。

今日では、老いも若きも、たくさんの人々がディズニーアニメを見ながら、また、ディズニーランドの乗り物に乗りながら、フロー状態を経験している。ウォルト・ディズニー氏の最も偉大な遺産は、フロー状態を誰でも持続的に経験できるようにしたことかもしれない。彼のおかげで子供時代の魔法を永遠に失っていたかもしれない何百万という普通の人々が、フロー状態を共有できるようになったのだから。

フロー状態、あるいは仕事と自己との関係という文脈において、日本人の態度は、少なくとも西洋の標準と比べたら、特異と言っ

ていいだろう。西洋ではデイズニーのような人々は例外的だ。⁽⁴⁾キリスト教の伝統の中では、労働は必要悪と見なされているが、日本人は、仕事を、それ自体で何かポジティブな価値があるものとして受け入れている。退職に対する態度も、日本では違う。ここではサラリーマンは、定年に達し退職した後でさえ、何か仕事をすることを楽しみにしている。——そしてそれは、この人たちが何をしたいかわからないからではないのである。

チクセントミハイは、フローに関する研究のインスピレーションを、友人の画家を観察している時に得たと証言している。その友人は、何時間も作品に向かい続けて飽きることがなく、しかもその作品を売るつもりもなければ、それに対する経済的な報酬を得ることも考えてもいなかった。直接的な報酬や、世間からの認知を求めることなく、「（今ここ）」にいる「喜びに自分自身をただ浸しているという、こういった特別な心の状態、もしくは仕事倫理が、（生きがい）」という日本語の概念の核心部なのである。

以前、私は一度、雅楽を供する^{がくけ}楽家に生まれた著名な雅楽師、東儀秀樹氏^{とうぎゆき}と会話をしたことがある。皇室に仕える音楽家は、毎年皇居で開かれる何百という儀式、祭礼のため、特別な音楽を担っている。このような伝統的な、古い宮廷音楽と舞踊は、合わせて「雅楽」と呼ばれる。「雅楽」は千年以上もの間、宮廷で演じられ続けてきた。「東儀」は奈良時代から雅楽に関わってきた東儀家、すなわち千三百年以上も続いている家の名前である。東儀は、雅楽師が演奏する機会はたくさんあると私に言った。例えば、ある天皇の千二百年記念ということで演奏する。私がそういった音楽は誰が聴くのかと尋ねると、彼はあつさりこう答えた。「誰も聞かない」。

「私たちは皇居の静けさの中、誰も聞く人がいないところで、楽器を鳴らし、歌い、踊るんです。深夜まで演奏します。そんな時には、亡くなった天皇の魂が天から降りてきて、私たちとしばらくの間過ごし、音楽を楽しまれていくような、そんな感覚がするものです」。東儀は自分が言っていることがごく当たり前のような感じでこう語った。雅楽という伝統の中にいる音楽家にとつて、聴衆が誰もいない中で演奏するというのは、何ら特別ではない。いつものことのようにだった。

⁽⁵⁾ 東儀の話は『（今ここ）』というフロー状態についての、とても詩的で、胸に刺さる説明となっている。あなたが至福の

集中状態にあるならば、聴衆など必要ないのだ。あなたは「今ここ」を楽しんでいて、だから続けているのである。

人生では、我々は時に、優先順位や価値の置き方を間違える。特に我々は報酬を得るために何かをしがちである。もしも、報酬が見込めないならば、がっかりして、仕事に対する興味と情熱を失ってしまう。これは全く間違ったアプローチなのである。通常、行為と報酬の間には時差があるものだ。あなたが良い仕事を成し遂げたとしても、報酬は必ず与えられるとは限らない。受け入れられ、認められるというのは、確率論的にしか起こらず、自分がコントロールできるものを超えて、たくさんの要素に依存することなのだ。もしも努力する過程こそ自分の幸福の第一の源にできたなら、あなたは人生の最も重要な課題に成功したことになる。

だから、誰も聴いていないときにも、音楽を奏でよう。誰も見ていないときに、絵を描こう。誰も読む人がいない、短い物語を書こう。あなたの人生は溢れんばかりの内なる喜びと満足に満たされるであろう。もしもそうすることに成功したなら、あなたは「今ここ」にいる」達人になるのである。

(茂木健一郎「生きがい」による)

問1 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、各群①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は

1

5

(ア) 拒絶感

1

① 人の話をサエギる
③ 申し出をコバむ

② 家賃がトドコオる
④ 人の発言をサマタげる

(イ) 自己啓発

2

① 手紙にハイケイと書く
③ オンケイを受ける

② ケイソツな判断をした
④ 事前にケイコクしていた

(ウ) 描き

3

① カツキ的なできごと
③ センク的な試み

② ナエギを植える
④ 静物をソビヨウする

(エ) 尋ねる

4

① 医師のシンサツを受ける
③ 先生のお宅をハウモンする

② チョウジュ社会である日本
④ この騒ぎはジンジョウじゃない

(オ) 遂げた

5

① 公金を横領してチクデンした
③ 所属していたブタイ

② 犯行はミスイに終わった
④ 若者のゼントを祝す

問2 波線部 a・b 及び空欄 c について、各問いに対する答えとして最も適当なものを、それぞれ①～④のうちから一つずつ選び

なさい。

解答番号は

6

8

【波線部 a】「匿名」とあるが、この言葉を使った短文として正しいものを一つ選びなさい。

6

- ① 年賀はがきの表に相手の住所と匿名を書いた。
- ② 逃走した犯人は宿泊者名簿に匿名を記していた。
- ③ 歌舞伎役者の匿名披露公演があった。
- ④ 匿名で企業の内部告発文書が出された。

【波線部 b】「与った」とあるが、この意味で「与」が用いられている熟語を一つ選びなさい。

7

- ① 贈与
- ② 参与
- ③ 与党
- ④ 与奪

【空欄 c】ここに当てはまる言葉を一つ選びなさい。

8

- ① 目を奪われる
- ② 目に染みる
- ③ 目のくらむ
- ④ 目を引く

問3 傍線部(1)「フロー状態を達成するためには、自我を解き放つ必要があるのだ」とあるが、「自我を解き放つ」ことで得られ

る「フロー状態」とは、どのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

9

- ① 多くの人から認められたいという邪念を振り払って仕事に打ち込んでいる状態
- ② 他人の承認を得られる仕事なのかという疑いや不安が心に渦巻いている状態
- ③ 報酬や他人からの評価を意識することなく自らの仕事に没入している状態
- ④ 仕事と自分の幸せを切り離して在りのままの自分を受け入れている状態

問4 傍線部(2)「古くから残っている焼き物は、純粹で、誠実な姿をしている」とあるが、それはなぜか。その答えとして最も適

当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

10

- ① 古くから残っている焼き物は、制作者の意図や個性を表現するものではなく、器を使う人の思いに寄り添ったものだから。
- ② 古くから残っている焼き物は、制作者の意図や個性を器を使う人が受けとめて、生活の中に定着させていったものだから。
- ③ 古くから残っている焼き物は、器をつくる制作者の意図や個性を離れることによって、芸術的価値を高めていったから。
- ④ 古くから残っている焼き物は、時の流れの中で、器の奥に隠されていた制作者の意図や個性が徐々に表れていったから。

問5 傍線部③「宮崎が子供の立場に自分自身を置くことができるから、子供を虜にするアニメの傑作を次から次へと生み出せる

のだ」とあるが、ここから宮崎駿氏のアニメ作りについて、どのようなことがうかがえるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

11

- ① 宮崎駿氏が子供の心のまま無心にアニメの制作に向かい、その仕事に打ち込む自分にとっての〈今ここ〉を楽しんでいる。
- ② 宮崎駿氏は子供の心を惹きつける〈今ここ〉にあるものを見つけることで、アニメ制作を夢ある仕事に高めようとしている。
- ③ 宮崎駿氏が子供にとってかけがえのない作品を作ることを使命と思い、自分にとっての〈今ここ〉を充実させている。
- ④ 宮崎駿氏は子供を大切に思い、アニメ作品によって子供にとっての〈今ここ〉をいかに表現するかに心を砕いている。

問6 傍線部(4)「キリスト教の伝統の中では、労働は必要悪と見なされているが、日本人は、仕事を、それ自体で何かポジティブ

な価値があるものとして受け入れている」とあるが、この部分はどのようなことを述べているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

12

① 西洋では、仕事をする事自体が罪悪であり、〈生きがい〉は仕事以外にあると考える傾向が強いが、日本では、仕事そのものに人生のすべてを賭け、そこで何かを成し得てはじめて〈生きがい〉すなわち生きる意味があると考えられる傾向がある。

② 西洋では、仕事は楽しみながらやる事が〈生きがい〉であり、生活を向上させるための手段にはならないが、日本では、仕事は自分を高め生活を向上させるための手段であり、それに打ち込んだ結果として〈生きがい〉が生まれてくると考える。

③ 西洋人は、仕事は生活の豊かさ(〈生きがい〉)につながるものだ(と)知りながら、前向きに取り組もうとしない傾向があるが、日本人は、仕事そのものには魅力はなくても、我を忘れて没入することが〈生きがい〉につながると考える傾向がある。

④ 西洋人は、仕事は生活のために仕方なくするものであり、自分の幸せを実現するための手段として考えがちだが、日本人は、仕事に没入し楽しむ中で得られるかけがえのない充足感こそが〈生きがい〉として人生を支えていくものだ(と)考える。

問7 傍線部(5)「東儀の話は『今ここ』にいる」というフロー状態についての、とても詩的で、胸に刺さる説明となっている」

とあるが、筆者は、「東儀の話」をどのように受けとめているのだろうか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

13

① 聴衆がいない空間であっても、演奏する者の心が一つになって楽器を奏で歌い踊り至福の時間を味わうということは、人生において自分が『今ここ』にいると信じることを以外に喜びや幸福は見つからないことを教えてくれる。

② 聴衆はいるが、亡き天皇の魂と交流しながら、無心に歌い踊る時間と空間が出現することではじめて、『今ここ』にいるという確かな実感が、演奏するすべての人々に共有されるものとなるということを暗示している。

③ 聴衆がいないところで、無心に楽器を奏で歌い踊り、亡き天皇との魂の交流も感じられるような至福の時空に身を置く姿こそ、『今ここ』を大切にして生きることが人生の喜びや幸福につながることを現している。

④ 聴衆がいない静かな空間の中で楽器を奏で歌い踊ることが千年以上も昔から受け継がれている事実は、時間や空間を越えて、様々な人が『今ここ』を大切にしながら、雅楽に関わってきたことを裏付けている。

第2問 次の小説は大正五年（一九一六年）に書かれたものである。これを読んで後の設問（問8～14）に答えなさい。

東京帝国法科大学教授、長谷川謹造^{はせがわきんぞう}先生は、ベランダの籐椅子^{とういす}に腰をかけて、ストリントベルクのドラマトウルギー（作劇術）を読んでいた。先生の専門は、植民政策の研究である。が、学者としてのみならず、教育家としても、令名ある先生は、専門の研究に必要でない本でも、それが何等^{なんら}かの意味で、現代学生^{せいせい}の思想なり、感情なりに、関係のある物は、暇のある限り、必ず一応は、眼を通して置く。先生は留学中米国で結婚をした。だから、奥さんは、もちろん、亜米利加^{アメリカ}人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも変わりが無い。殊に、日本の巧緻なる美術工芸品は、少なからず奥さんの気に入っている。したがって、岐阜提灯^{ふぢろうちん}をベランダにぶら下げたのも、先生の好みというよりは、むしろ、奥さんの日本趣味が一端を現したものと見て、然るべきであらう。

先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提灯と、そうして、その提灯^{ちようちん}によって代表される日本の文明とを思った。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面ではかなりケン著^{けんしやく}な進歩を示している。が、精神的には、ほとんど、これという程の進歩も認める事ができない。否^{いな}、むしろ、ある意味では、墮落している。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救済する途^{みち}を講ずるのには、どうしたらいいのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道^{ぶしどう}による外^{ほか}はないと論断した。武士道なるものは、決してヘン狭^{へんきょう}なる島国民の道德^{もつ}を以て、目せらるべきものでない。かえってその中には、欧米各国のキリスト教的精神と一致すべきものさえある。この武士道によって、現代日本の思潮に帰趣を知らしめる事ができるならば、それは、独り日本の精神的文明に貢献する所があるばかりではない。ひいては、欧米各国民と日本国民との相互の理解を容易にするという利益がある。あるいは国際間の平和も、これから促進されるという事があるであらう。先生は、日頃から、この意味に於いて、自ら東西両洋の間に横たわる橋梁^{きょうりょう}にならうと思っている。こういう先生にとって、奥さんと岐阜提灯と、その提灯によって代表される日本の文明とが、ある調和を保って、意識に上るのは決して不快な事ではない。

ところが、何度かこんな満足を繰り返しているうちに、先生は、追々、読んでいる中でも、思量がストリントベルクとは、縁の遠くなるのに気がついた。そこで、ちよいと、忌々しそうに頭を振って、それからまた丹念に、眼を細かい活字の上へ曝しはじめた。すると、ちょうど、今読みかけた所にこんな事が書いてある。

——俳優が最も普通なる感情に対して、ある一つの恰好な表現法を発見し、この方法によって成功を勝ち得る時、彼は時宜に適すると適せざるとを問わず、一面にはそれが楽である所から、また一面には、それによって成功する所から、ややもすれば、この手段に赴かんとする。しかしそれが即ちマニール（型）なのである……

先生は、もともと、芸術、殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさえ、この年まで何度と数える程しか見た事がない。嘗てある学生の書いた小説の中に、梅幸という名が、出てきた事がある。流石、博覧強記を以て自負している先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない。そこで、序の時に、その学生を呼んで、訊いてみた。

「君、梅幸というのは何だね」

「梅幸ですか。梅幸といいますのは、当時、丸の内の帝国劇場の俳優で、ただ今、太閤記十段目の操を勤めている役者です」
小倉の袴をはいた学生は、慇懃にこう答えた。だから、先生はストリントベルクが、簡勁な筆で論評を加えている各種の演出法に対して、先生自身の意見というものは全然ない。ただ、それが、先生の留学中、西洋で見た芝居のあるものを連想させる範囲で、幾分か興味を持つ事ができるだけである。

ベランダの天井からは、まだ灯をともしない岐阜提灯が下っている。そうして、籐椅子の上では、長谷川謹造先生が、ストリントベルクのドラマトゥルギー（作劇術）を読んでいる。しかし、先生は、それを途中でやめなければならなかった。何故といえば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまったからである。世間はいくら日が長くても、先生を忙殺しなければ止まないらしい。

先生は、本を置いて、今し方小間使が持つて来た、小さな名刺を一瞥した。象牙紙に、細く西山簗子と書いてある。どうも、今

までに逢^あつた事のある人ではないらしい。交際の広い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念^{ねん}の為^{ため}に、一通り、頭の中の人名簿を繰^くつてみた。が、やはり、それらしい顔も、記憶に浮^うんで来ない。そこで、栞^{しおり}代^{しろ}わりに、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、先生は、落ち着かない様子で、銘仙^{めいせん}の単衣^{ひとえ}の前を直しながら、ちよいとまた、鼻の先の岐阜提灯へ眼をやった。やがて、時刻をはかつて、先生は、応接室の扉をあけた。中へ入って、おさえていたノブを離すのと、椅子にかけていた四十恰好の婦人の立ち上ったのが、ほとんど同時である。客は上品な鉄御納戸^{てつおなんど}の単衣を着て、それを黒の縞^{こう}の羽織が胸だけ細く剩^{あま}した所に、帯止めの翡翠^{ひすい}を、涼しい菱^{ひし}の形にうき上らせている。髪が、丸髻^{まるまげ}に結つてある事は、こういう些事^{さじ}に無頓着な先生にも、すぐわかった。日本人に特有な、丸顔の、琥珀色^{こはく}の皮膚をした、ケン母^{けんぼ}らしい婦人である。先生は、一瞥して、この客の顔を、どこかで見た事があるように思った。

「私が長谷川です」

先生は、愛想よく会釈した。こう言えば、逢^あつた事があるのなら、向こうで言い出すだろうと思つたからである。

「私は西山憲一郎の母でございます」

婦人は、はっきりした声で、こう名乗つて、それから、丁寧^{ていねい}に会釈を返した。

西山憲一郎といえば、先生も覚えている。やはりイプセンやストリントベルクの評論を書く生徒の一人で、専門は確か独法（ドイツ法）だったかと思うが、大学へ入ってから、よく思想問題をひっさげでは、先生の許^{もと}に出入した。それが、この春、腹膜炎に罹^{かか}つて、大学病院へ入院したので、先生も序ながら、一、二度見舞いに行つてやつた事がある。この婦人の顔を、どこかで見た事があるように思つたのも偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいい青年と、この婦人とは、日本の俗諺^{ぞくげん}が、瓜二つと形容するやうに、驚くほどよく似ているのである。

「はあ、西山君の……そうですか」

先生は、独りで頷^{うなづ}きながら、小さなテーブルの向こうにある椅子を指した。

「どうか、あれへ」

婦人は一応突然の訪問を謝してから、また丁寧^{ていねい}に礼をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂^{たもと}から白いものを出したのは手巾^{ハンケチ}であろう。先生は、それを見ると、早速テーブルの上の朝鮮団扇^{うちわ}をすすめながら、その向こう側の椅子に座をしめた。

「結構なお住まいでございます」

婦人は、ややわざとらしく、部屋の中を見回した。

「いや、広いばかりで一向かまいません」

こういう挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて来た冷茶を客の前に直させながら、すぐに話頭を相手の方へ転換した。

「西山君は如何^{いかが}です。別段御容態に変わりはありませんか」

「はい」

婦人は、つつましく両手を膝の上に重ねながら、ちよいとことばを切って、それから、静かにこう言った。やはり、落ち着いた滑らかな調子で言ったのである。

「実は、今日も倅^{せがれ}の事で上^{あが}ったのですが、あれもとうとう、いけませんでございました。在生中は、いろいろ先生に御厄介になりました……」

婦人が手にとらないのを遠慮だと解釈した先生は、この時ちようと紅茶茶碗^{こうちやちやわん}を口へ持つていこうとしていた。なまじいにくどく、すすめるよりは、自分で啜^すって見せる方がいいと思つたからである。ところが、まだ茶碗^{ちやわん}が、柔らかな口髭^{くちひげ}にとどかないうちに、婦人のことばは、突然、先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだろうか、飲まないものだろうか。こういう思案が、青年の死とは全く独立して、一瞬の間、先生の心を煩わせた。が、いつまでも、持ち上げた茶碗を、片づけずに置く訳にはいかない。そこで先生は思い切つて、がぶりと半碗の茶を飲むと、心もち眉をひそめながら、むせるやうな声で、「そりゃあ」と言った。

「……病院に居りました間も、よくあれがお噂^{うわさ}など致したものでございますから、お忙しかろうとは存じましたが、お知らせかた

がた、お礼を申し上げようと思ひまして……」

「いや、どうしまして」

先生は、茶碗を下へ置いて、その代わりに青い蠟ろうを引いた団扇をとりあげながら、懽然ふぜんとして、こう言つた。

「とうとう、いけませんでしたかなあ。ちょうど、これからという年だったのですが……私はまた病院の方へも御無沙汰してゐたのですから、もう大抵、よくなされた事だとばかり、思つていました。すると、何時になりますかな、亡くなられたのは」

「昨日が、ちょうど初七日でございます」

「やはり病院の方で……」

「さようでございます」

「いや、實際、意外でした」

「何しろ、手のつくせる丈だけだけは、つくした上なのでございますから、あきらめるより外はございませんが、それでも、あれまでに致してみますと、何かにつけて、⁽¹⁾グ痴グチが出ていけませんものでございます」

こんな對話を交換している間に、先生は、意外な事實に気がついた。それは、この婦人の態度なり、挙措きょそなりが、少しも自分の息子の死を語っているらしくないという事である。眼には、涙もたまつていない。声も平生の通りである。その上、口角には、微笑さえ浮んでいる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事を語つてゐるとしか思わなかつたのに相違ない。先生にはこれが不思議であつた。

⁽²⁾昔、先生が、^(ベルリン)伯林に留学してゐた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに当る、ウィルヘルム第一世が⁽³⁾ホウ御された。

先生は、この訃音ふいんを行きつけの珈琲店コーヒで耳にしたが、元より一通りの感銘しか受けようはない。そこで、いつものように元氣のいい顔をして、杖つえを脇にはさみながら、下宿へ歸つて来ると、下宿の子供が二人、扉をあけるや否や、両方から先生の頸くびに抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色のジャケットを着た十二になる女の子で、一人は、紺の短いズボンをはいた九つにな

る男の子である。子煩悩な先生は訳がわからないので、二人の髪の毛を撫でながら、しきりに「どうした。どうした」と言つて慰めた。が、子供は中々泣きやまない。そうして、涙をすすり上げながら、こんな事を言う。

「おじいさまの陛下が、お亡くなりなすつたのですつて」

先生は、一国の元首の死が、子供にまで、これ程悲しまれるのを不思議に思った。独り皇室と人民との関係というような問題を考えさせられたばかりではない。西洋へ来て以来、何度も先生の視聴を動かした、西洋人の **A** な感情の表白が、今更のうちに、日本人たり、武士道の信者たる先生を驚かしたのである。その時の怪訝と同情とを一つにしたような心持ちは、未だに忘れようとしても忘れる事ができない。先生は、今もちようど、その位な程度で、逆に、この婦人の泣かないのを不思議に思っているのである。

が、第一の発見の後には、間もなく、第二の発見が次いで起つた。

ちようど、主客の話題が、亡くなった青年の追懷から、その日常生活のデテールに及んで、更にまた、もとの追懷へ戻ろうとしていた時である。何かの拍子で、朝鮮団扇が、先生の手をすべつて、ぱたりと床の上に落ちた。会話は無論寸刻の断続を許さない程、切迫している訳ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手をのばした。団扇は、小さなテーブルの下に、上靴にかくれた婦人の白足袋の側に落ちてゐる。

その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持った手がのつている。もちろん、これだけでは発見でも何でもない。が、同時に先生は、婦人の手はげしくふるえているのに気がついた。ふるえながら、それが感情の激動を強いて抑えようとするせいか、膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに、かたく握っているのに気がついた。そうして、最後に、皺くちゃになった絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれているように、縋のある縁を動かしているのに気がついた。婦人は、顔でこそ笑っていたが、実はさつきから、全身で泣いていたのである。

団扇を拾つて、顔をあげた時に、先生の顔には今までにない表情があつた。見てはならないものを見たという敬虔な心持ちと、

そういう心持ちの意識から来るある満足とが、多少の芝居気で誇張されたやうな、甚だ複雑な表情である。

「いや、御心痛は、私のような子供のない者にも、よくわかります」

先生は、眩^{まぶ}しいものでも見るように、やや、大仰^{おおぎよう}に頸^そを反らせながら、低い、感情の籠^{かご}った声でこう言った。

「有難うございます。が、今更、何と申ししましても、かえらない事でございますから……」

婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顔には、依然として、ゆたかな微笑がたたえている。

それから、二時間の後である。先生は、湯に入つて晩飯をすませて、食後の桜実^{さくらんぼ}をつまんで、それからまた樂々と、ベランダの籐椅子に腰を下した。長い夏の夕暮は、いつまでも薄明かりを漂わせて、硝子戸^{がらす}をあけはなした広いベランダは、まだ容易に、暮れそうな気配もない。先生は、そのかすかな光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へのせて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提灯の赤い房を眺めている。例のストリントベルクも、手にはとつて見たものの、まだ一頁^{ぺじ}も読まないらしい。それも、そのはずである。先生の頭の中は、西山篤子夫人の **B** 振る舞いで、未だにいっぱいになっていた。

先生は、飯を食いながら、奥さんに、その一部始終を話して聞かせた。そうして、それを、日本の女の武士道だと賞賛した。日本と日本人とを愛する奥さんが、この話を聞いて同情しないはずはない。先生は、奥さんに熱心な聴き手を見出した事を満足に思つた。奥さんと、さつきの婦人と、それから岐阜提灯と……今では、この三つが、ある倫理的な背景を持つて、先生の意識に浮んで来る。

先生はどの位、長い間、こういう幸福な回想に耽^{ふけ}っていたか、わからない。が、そのうちに、ふとある雑誌から寄稿を依頼されていた事に気がついた。その雑誌では「現代の青年に与ふる書」という題で、四方の大家に、一般道徳上の意見を徴^{ちやう}していたのである。今日の事件を材料にして、早速、所感を書いて送る事にしよう。こう思つて、先生は、ちよいと頭を搔^かいた。

搔いた手は、本を持っていた手である。先生は、今まで閑却されていた本に、気がついて、さつき入れて置いた名刺を印に、読みかけた頁を開いて見た。ちょうど、その時、小間使が来て、頭の上の岐阜提灯をともしたので、細かい活字も、さほど読むのに

煩わしくない。先生は、別に読む気もなく、漫然と眼を頁の上に落とした。ストリントベルクは言う。

——私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分パリから出たものらしい、手巾のことを話した。それは、顔は微笑していないが、手は手巾を二つに裂くという二重の演技であつた、それを我等は今、メッツヘン（臭味）と名づける——

先生は、本を膝の上に置いた。開いたまま置いたので、西山篤子という名刺が、まだ頁の真ん中にのつている。が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。そうかといって、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それらの平穩な調和を破ろうとする、得体の知れない何物かである。ストリントベルクの指弾した演出法と、実践道德上の問題とは、もちろん違う。が、今、読んだ所から受けとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心持ちを、擾みだそうとする何物かがある。武士道と、そうしてそのマニール（型）と。

先生は不快そうに二、三度頭を振って、それからまた上眼を使いながら、じつと、秋草を描いた岐阜提灯の灯を眺め始めた。

……

（芥川龍之介「手巾」による）

※注1 ストリントベルク・・・スウェーデンの劇作家・小説家

※注2 イプセン・・・ノルウェーの劇作家・詩人

問8 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に適する漢字を、各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は

14

18

(ア) ケン 著

14

① 見

② 顕

③ 陰

④ 謙

(イ) ヘン 狭

15

① 辺

② 偏

③ 返

④ 遍

(ウ) ケン 母

16

① 健

② 兼

③ 堅

④ 賢

(エ) ゲ 痴

17

① 愚

② 虞

③ 具

④ 供

(オ) ホウ 御

18

① 峰

② 宝

③ 崩

④ 奉

問9 二重傍線部①～④の本文中における意味として最も適当なものを、各群①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 19 ～ 21

① 風馬牛の間柄

19

- ① 遠く隔たっている関係
- ② 身近に感じられる関係
- ③ 付かず離れずといった関係
- ④ 互いに必要としている関係

② 博覧強記を以て自負している

20

- ① 自分にはそれ程の知識や教養がないと謙虚に構えている
- ② 幅広く経験を積んで自己を高めていこうという意志がある
- ③ 広く書物を読み、多くの知識を持っているという誇りがある
- ④ 様々な才能を持ち、難しい課題もやり遂げる自信を持っている

③ 些事に無頓着な

21

- ① どんな小さなことにも気づく
- ② 自分に関係ないことは無視する
- ③ 日常のささいなことは気に留め^とない
- ④ 事情が分か^{つか}ついても気を遣^{つか}わない

問10

傍線部(1)「先生は、日頃から、この意味に於いて、自ら東西両洋の間に横たわる橋梁になろうと思っている」とあるが、この「先生」の思いを説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

22

- ① 日本の武士道と欧米各国のキリスト教はそれぞれ異なった風土と歴史から成り立っていることを、亜米利加人である妻との生活の中で実感している自分こそ、日本と西洋の文化の架け橋を築いていけるという思い
- ② これからの日本が武士道精神を究め、過去にはなかった新たな文化を創り出すことができれば、自分の妻のように日本文化を深く理解する西洋人が増え、結果的に日本と西洋の架け橋がつくられていくという思い
- ③ 日本の武士道も欧米各国のキリスト教精神も、どちらも個人の内面を支える基盤となっているという事実を、亜米利加人の妻を持つ自分が伝えていくことで、日本と西洋の文化の架け橋をつくることができるという思い
- ④ これからの日本人は武士道精神をもって西洋と向き合い相互の理解を深めていくことが大切であり、身近に日本文化を深く愛する亜米利加人の妻を持つ自分こそ、日本と西洋の架け橋となる役割を担っていけるという思い

問11 傍線部(2)「昔、先生が、伯林に留学していた時分の事である」とあるが、「先生」の伯林(ベルリン)留学中の話には、ど

のような意図が込められているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

23

① 西洋人がためらうことなく自らの感情を表出することを、自国の元首の死を嘆き悲しむ子どもたちの姿をとおして伝えようとしている。

② 西洋人が社会のできごとに広く関心を寄せることを、自国の元首の死に涙を流す子どもたちを一つの例として推測させようとしている。

③ 西洋人も日本人と同様に自国の元首を敬愛していることを、その死を嘆く子どもたちの姿を描くことによって強く印象づけようとしている。

④ 西洋人も日本人も身近な人の死に動揺することを、自国の元首の死に絶望するあまり、異国人に救いを求める子どもたちの姿と重ねている。

問12 空欄 A、 B に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選

びな。

解答番号は 24

① 印象的

B いたたまれない

② 開放的

B おだやかな

③ 衝動的

B けなげな

④ 偶発的

B さりげない

問13 傍線部(3)「第一の発見の後には、間もなく、第二の発見が次いで起った」とあるが、「第一の発見」、「第二の発見」とは、

どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 25

① 前者は、婦人が自分が親しくしていた教え子の母親だったことであり、後者は、婦人が先生自身とは初対面でありながら、息子が死んだ経緯を事細かに説明しようとしているということである。

② 前者は、息子の死を語る婦人から悲しい様子が感じられないことであり、後者は、婦人が穏やかに話をしながら悲しみで取り乱すことのないよう、自らの感情を抑え込んでいるということである。

③ 前者は、婦人が息子の死を他人事のように語っていることであり、後者は、その態度や口調とは裏腹に、自分の思いを在りのままに伝えたいという欲望が意識の下に潜んでいるということである。

④ 前者は、息子の死を淡々と語る婦人の言葉から深い悲しみがうかがえることであり、後者は、その悲しみが時の経過とともに自らの運命に対する憤りとなって身体からだごと震えているということである。

問14

波線部「——私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分パリから出たものらしい、手巾のことを話した。それは、顔は微笑していながら、手は手巾を二つに裂くという二重の演技であった、それを我等は今、メッツヘン（臭味）と名づける——」とあるが、この一節を読んだ後、「先生」の心境は大きく変化する。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。なお、波線部を選択肢の中では「この一節」と表記している。

解答番号は

26

① 西山篤子夫人（婦人）の振る舞いを、自らの悲しみを押し隠して耐える武士道精神の現れだとして高く評価していたが、この一節を読んだ後、時代の流れとともに日本人として大切にすべき価値が見失われてしまうような不安を覚え、同時に、武士道は感情表現の一つの型とはなり得ないという諦めも感じている。

② 西山篤子夫人（婦人）の振る舞いは、これまで日本で育まれてきた武士道精神が演技の型として高められたものだと言賞賛していたが、この一節を読んだ後、このまま時代が進めば、演技自体の価値が失われ、武士道の絶対性とともに自分自身の存在価値まで否定されてしまうのではないかとといった恐れを抱いている。

③ 西山篤子夫人（婦人）の振る舞いに、何事にも型を重んじる武士道精神を垣間見るとともに、型は容易に身につくものではないと感心していたが、この一節を読んだ後、そのような振る舞いが、西洋では価値の乏しいものとして扱われることに憤りを覚え、今まで以上に武士道とは何かを突き詰めた다고考えている。

④ 西山篤子夫人（婦人）の振る舞いこそ、日本人が大切にすべき武士道精神の現れだと深く感動し満ち足りた思いに浸っていたが、この一節を読んだ後、そのような振る舞いも、西洋においては演技の一つの型のごとく見なされるのではないかという思いがよぎり、武士道の普遍性に対する自らの信念が揺らいでいる。

